

小津安二郎の「松阪」について

映画評論家・彼岸花映画祭顧問 吉村 英夫



〈32〉

(毎週火、木曜掲載)



【略歴】1940(昭和15)年、津市生まれ、在住、83歳。松阪工業高校や三重大学などで教壇に立つ傍ら、映画監督・小津安二郎の顕彰などに努めてきた。小津安二郎生誕100年記念三重映画フェスティバル2003実行委員会会長などを歴任。「一行詩 父よ母よ」など著書多数。最新作に「男はつらいよ、もう一つのルート」ポピュリズム映画考」がある。

井村屋グループの創業者井村二郎と小津安二郎に接点がある。井村の証言と小津日記で符丁が一致する。同じ松阪出身ということ二人は話しあっているのだ。井村が言う。

もうひとつの『東京物語』考

私は松阪生まれで、商業学校を出て、家が菓子屋だったから、そちらをやっていた。20歳になって徴兵検査を受け、甲種合格になりました。それから少しして現役で近衛へ入ったわけで、小津安二郎さんとそこで出あったんです。青山の近衛歩兵四連隊第十一中队で、二・二六事件の前の年でした。…兵隊は朝六時ころに起きやんならんだが、小津

「井村屋」創業者・井村二郎の回想

重フエスタ」のプログラム所収

井村の一九三五年の思い出話
は正確である。次の小津「全日記」と照合して確認できる。破天荒な記述である。こんな「兵役」が認められていたとは。
七月十日(水)入営 十二子 満子 武：面会也…ウイス 日(金)吉川満子：坂本武 代々 キー 海苔(のり)巻 菓子
山ヶ原 円タクを拾って行く… 浜場少尉と呑む 斑に帰り点呼も知らずにねる 一十三日(火) 洗足池 行軍…桜井 辻村と洗足池畔に麦酒をのみ天ぶらをくひ 昼寝す 集合時間に三十分おくれる 二十四日(水)午後 休養 二十五日(木)飯田 蝶し入れをもって陣中見舞いにくる。井村はそれを見て、小津に話し掛けたのである。(つづく)

寄稿



映画監督・脚本家 小津安二郎 (1903～63年)

1903(明治36)年12月12日、東京・深川生まれ。10歳の時、東京勤務の父を残し母子は松阪市垣鼻町に転居。旧制宇治山田中学を卒業後、飯南郡飯高町の官立小で代用教員になる。23歳、還暦の日死去。
「東京物語」は53(同28)年に公開され、英国誌で「世界の映画第一位になった傑作。この作中で「まつあか」松阪」のせりふが出てくる。広島県尾道に住む母が危篤で、子供たちが駆け付けるが、国鉄勤務の末っ子・敬三(大坂志郎)は「松阪」出張中で臨終に間に合わなかった。葬儀後、子供たちは帰るが、戦死した息子の妻・紀子は残り、義父の面倒を見る。
2021(令和3)年4月、殿町に「小津安二郎松阪記念館」が開館した。